Osaka University Knowledge Archive

Title	項目列記の「～ト」表現について
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	詞林. 1990, 8, p. 60-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67294
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

項目列記の「〜ト」表現について

藤田　保幸

1－1　この稿では、筆者がこれまで研究してきた「引用」の表現とも連続する「〜ト」の表現（注1）のうち、「A、B、Cト」のように項目列記の形をとって、事柄・事物の具体的なあり様を示すものをとりあげ、いささか検討してみたい。あらかじめ、列記される項目は名詞的なもの（注2）に限り、また、名詞であっても、一語文的なものの列記の場合（注3）は除くものとして見ていこう。

右のような名詞的な語（句）を列記する「〜ト」表現として、直ちに想起されるのは、次のような例である。

① 炊事、せんたく、障子張りと、今日は本当に忙しい。

② 味噌カツ、キシメン、守口漬と、今日は大変なごちそうだ。

③ 今日は、和博、知良、善行と欠席している。

④ 時代は江戸中期、十八世紀半ば、江戸時代の中でも、国学・洋学・漢学とあらゆる学問が炎のごとく燃えさかった学芸復興期のさなかのことです。

（杉本つとむ「方言に憑かれた男　越谷吾山」）

これらの「〜ト」は、述語の「忙しい」で示される状況の内実や、また、後に出てくる「大変なごちそう」とか「あらゆる学問」とかの名詞句で集合的に示されるものの内訳を、具体的に項目を列記して示す表現といえよう（③のように対応する名詞句が出ていない場合もある）。

これらの「〜ト」で列記される項目には、文の意味にかかわるような特別の順序があるとはよめない。いわば、構成項としてあるものを任意にとりあげて列記しただけである。ところが、「〜ト」による項目列記の表現には、事柄の表現として、列記される順序が意味をもっていると解せられるものがある。

⑤ 信号は、青、黄、赤と変わる。

⑥ 日本チームは、オランダ、台湾、ブラジルと連破して、決勝に進出した。

⑦ 討論会で見られた双方の力みも、東京、京都、東京と場所を移しながら、連日交歓会や野外研修を重ねるうち、少

しずつ和らいでいった。

（朝日新聞、朝、一九九〇・八・一一）

⑧　式は、開会の辞、学校長挨拶、来賓祝辞と続いた。

これらは、「変わる」「連破する」「場所を移す」「（式が）続く」といった事柄の具体的なあり様を、その事柄の進展過程に主体や対象としてかかわるもの、つまり「色」「相手」「場所」「挙行されること」の具体的な項目をかかわった順に列記することによって示しているとよめる。すなわち、配列の順序に意味があるのである。

故に、①～④と⑤～⑧では、次のような相違が出てくる。すなわち、「～ト」に列記される項目の列記の順を変えると、前者は、文の意味に別に変わりはないが、後者は、文の事柄的意味が変わってくる。

①・a　炊事、せんたく、障子張りと、今日は本当に忙しい。
①・b　せんたく、炊事、障子張りと、今日は本当に忙しい。
①・c　障子張り、炊事、せんたくと、今日は本当に忙しい。
②・a　味噌カツ、キシメン、守口漬と、今日は大変なごちそうだ。
②・b　守口漬、キシメン、味噌カツと、今日は大変なごちそうだ。
②・c　キシメン、味噌カツ、守口漬と、今日は大変なごちそうだ。
⑤・a　信号は、青、黄、赤と変わる。
⑤・b？信号は、赤、黄、青と変わる。
⑤・c？信号は、黄、青、赤と変わる。

例えば、⑤のaをb、cとすると、事実と異なるおかしなことになってしまう（注4）。

このように、「～ト」による列記表現には、並存する構成項を任意にとりあげて並べた①～④のようなものの他に、項目を一定の順序に列記することによって事柄の進展を具体的に写した⑤～⑧のようなものも見られる。以下では、状況・事物の具体的構成項を単に並列列記するだけとよめる「～ト」をセットの「～ト」、列記項目の配列順序に事柄の時間的進展を写しとるというよみが認められる「～ト」をプロセスの「～ト」と呼ぶことにしたい（注5）。

1－2　ところで、今度は次のような例はどうだろうか。

⑨　七月、八月、九月と、例年にない暑さが続いた。
⑩　中学、高校、大学と、私は愛知県で過ごした。

これらの「～ト」に列記される項目の順序は、もちろん変えることができない。また、なるほど、傍線部のあとの部分に述べられる事柄の進展のあり様を、このように列記することで、ある意味で具体的に述べているとはいえそうである。ただ、先の⑤⑥などの場合とは、事柄のあり方の表現の仕方が異なるだろう。例えば⑤⑥の場合、「～ト」で、「変わる」「連破する」という事柄について、その変わり方・連破する仕方の中味が明らかにされているのに対し、⑨⑩の場合、「暑さが続く」「愛

知県で過ごす」という事柄の中味（どう暑いのか・どのように過ごすのか）が示されるのではなく、それがどのような時間帯において進展したのかという点、つまり、それが時間の中でどのような広がりをもつのかということが、いわば外側から示される。換言すれば、この⑨⑩では、「～ト」による項目列記によって具体的に示されるのは、事柄の内的なあり方（内実）ではなく、外的なあり様（期間）なのである。が、こうした「～ト」も、事柄の進展の相を項目列記で示すという点では、一種のプロセスの「～ト」と考えておこう。ただ、先の⑤～⑧のようなプロセスの「～ト」が内実列記型、内容系列を示すものといえるなら、⑨⑩はいわば時点（段階）列記型、時点系列を示すものというべきだろう。

1－3　これまで、この種の「～ト」を正面からとりあげた研究は、筆者の知る限り、見あたらない。助詞の用例集などでも、きちんと説明されたものはないようである。唯一、この種の例をいくつかまとめてあげたものは、永野（一九五三）である（注6）。永野は、助詞「ト」の、「④動作・作用・状態の内容を示す」とした用法の一つに、次のようなものをあげている。

（二）動作・作用のしかた、行われ方を示す。

○袖から始まって、スカート後身頃と回を重ねてきましたが、～　（婦友、6、73）

○「私は小学校五年の時に当時上野の音楽学校の中にありました上野児童音楽学園に入り、そこで尋常科高等科と七年間上野音楽学校入学まで学びました。」　（音、6、29）

○「メニゥウの裏表、残らず食べても百円と掛からない。」　（文7増、73）

このうち、三つめは、項目列記ではないし、「～ト」が必ず数量的なものを導き、また、「～ナイ」と呼応するので、一つの別のパタンとすべきだろう（もっとも、連続する面のある現象もあるので、5でふれる）。前二者は、プロセスの「～ト」の例である。しかし、これを単に「動作・作用のしかた、行われ方」などと規定したのでは、あまりに広すぎる。また、現象の記述・整理としても、もちろんこれでは断片的で十分ではない。この稿では、こうした表現を、いささか立ち入って見てみようとするものである。

2－1　プロセスの「～ト」は、「～ト」による列記表現によって事柄の時間的進展を写すものである。故に列記の順序は変えられない。セットの「～ト」は、「～ト」によって、一定の状況や事物を構成する、並列的に存在する項目を任意の順にとりあげるものである。故に、順序をかえても表現する事柄的内容は変わらない。

一応、右のように了解できるが、それでは、プロセスの「～ト」のよみ、セットの「～ト」のよみを支えるのはどのような条件なのか。個々の例を見ていると、直観的にプロセスなのかセットなのかよみが揺れる例・あいまいな例もある。このあた

り、いろいろな条件もからむので、少し整理してみておこう。

2－2　プロセスの「～ト」のよみがはっきり出てくるのは、まず、項目列記の「～ト」が時間的な変化や時間的な広がりをもって進行する事柄を表す述部と結びつき、その変化・進展の内実にかかわる項目を列記する場合で、この場合、内実列記型のプロセスの「～ト」のよみになる。先の⑤～⑧の例がそれだが、今少し用例を掲げておこう。

⑪　利之は、きのうも寿司屋で、ハマチ、タマゴ、エビ、ハマチ、赤貝、ハマチ、アナゴと食べた。

⑫　私の方は相変わらず、節用集をもとめて、右往左往しています。明日から、国図（引用者注・国会図書館）・東大・筑波・仙台・酒田・鶴岡とまわってみようかと思っているところです。（筆者宛私信）

⑬　京の街ではネオンの消えた午後八時に、「大」の字の如意が、「妙法」「舟形」「左大文字」「鳥居」と点火されていきます。（福原堂礎「お墓の謎と常識」）

⑭　五輪塔の正面から発心・修行・菩提・涅槃（引用者注・五輪塔の各面の名称）とまわるのを繰り返すわけです。（同右）

⑮　田島氏のあと、幹事長は、丸山善行・堤和博・近本謙介と続いている。

⑯　都では、四月から六月にかけて、灌仏会、賀茂祭、端午節句、大祓と行事が続く。

プロセスの「～ト」とよめる典型的な表現で、「～ト」に一定の時間的広がりをもった事柄の進展のプロセスにかかわる対象・主体を列記し、進展プロセスを具体的に示すものである。

こうした例に関して、一つ注意しておきたいのは、進展する時間的な広がりをもった事柄とは、「続く」のような抽象的なものも含めて切れ目のない一回的なものであることが一般的だろうが、必ずしもそうしたものでなくともよいということである。一定の行為・動作が反復されるような事柄でも、その総体を一つのまとまりとしてとらえれば、一つの時間的な広がりをもった進展する事柄としてみることができるのであり、述部がそうした総体を示していて、その繰り返し進展が「～ト」に写されているとみられる例もある。例えば、⑪では、スシを食べるというのは一回的に完結した行為だが、それが繰り返し進展するさまが、「～ト」に写されるのである（そうした繰り返し進展の意味をはっきりさせようとすると、⑬のように「～ティク」を用いることもある）。次の例でも、「発車する」という語の語彙的な意味は、何か（乗り物）の一回的な動きであるはずだが、繰り返し「発車」が行なわれていくという総体としての事柄を描く場合には、「～ト」にいくつも「出発する」主体をたてて表現することができるのである。

⑰　そのあと一番ホームから、豊橋行き、東岡崎行き、蒲郡行きと発車した。

ところで、述語との相関において内実列記型のプロセスの

「〜ト」とよまれるためには、述部の示す事柄が、切れめない一まとまりであろうが繰り返し進展であろうが、時間的に進展するものとして示されねばならないのであって、静止的な状態性の意味では、プロセスの「〜ト」のよみは出てこない。次の例を比較してほしい（もちろん、「〜ト」は共同者を示すものではない）。

⑱・a　和博、謙介、卓郎と風呂にはいった。

⑱・b　和博、謙介、卓郎と風呂にはいっている。

bのように「〜テイル」形の状態表現の述語では、「〜ト」は、セットの「〜ト」によめてしまう（つまり、そんな顔ぶれがちょうど風呂に入っているような意に読めてしまう）。

2－3　次に、時点列記型であるが、これがそれとしてよまれるのは、「〜ト」に、述部を中心とする以下の表現が進展・持続する時間的広がりの各ポイントを示す項目が列記された場合である。先の⑨⑩の例がそれだが、今少し用例を掲げておこう。

⑲　十五、十六、十七と、私の人生暗かった。
（「夢は夜ひらく」）

⑳　きのう、きょうと、うだるようなむし暑さがつづいている。
（槻野けい「いまを生きる」）

㉑　古代－中古－中世－近世と、この東西の対立は連綿とつづき、現代に至るというわけです。
（杉本「方言に憑かれた男　越谷吾山」）

こうした場合、⑲のように述部は、進展的な意味をもたない状態性の意味のものでもよい。

これらは、事柄の持続期間を、その期間の各ポイント・段階を列記して示したもので、述部というより、文全体の時間的規定語として働いているといえよう。それは、これらの「〜ト」を具体的内実とする時間規定語をしばしば補うことができることでもわかる。

⑳・a　きのう、きょうと二日間、うだるようなむし暑さがつづいている。

ただ、次のような例では、そうした期間にあたる語を補うと、不可というわけではないが、いささか違和感がある。いくらか失われるニュアンスがあるのである。

㉒・a　彼は、昨年、今年とダイオードの研究を飛躍的に発展させてきた。

㉒・b　彼は、昨年、今年と二年間ダイオードの研究を飛躍的に発展させてきた。

すなわち、「〜ト」で列記する場合、単なる期間を示すのではなく、段階を追って、step by stepというニュアンスが出てくるが、期間を示す語が共起すると、そうしたニュアンスが抑止されるのである。そういった表現価値の微妙な違いにも注意しておきたい。

今一つ注意しておきたいのは、⑲⑳㉑の例など典型的な例では、この種の「〜ト」で列記されるのは、語義そのものからして時点・段階を意味すると解せるコトバであるが、次のように、

時点・段階を表すものとは本来言えないようなコトバが、時点・段階を表すものとして、転用されることもあるということである。

㉓ 私は、東京、カリフォルニア、ミシガン、大阪、京都と、言語学を研究してきた。

㉔ 政府の内政方針は、池田、佐藤、田中と転々とした。

㉕ ピテカントロプス、ネアンデルタール人、クロマニョン人と、石器の発達は著しいものがある。

これらは、それぞれの時期を代表させることのできる項目系列で時点（段階）の系列を形成したものである。㉓は、ある研究者が居住してきた土地の名を順々にあげて、その土地にいた時期をも順に示すものとしている。㉔はその時々の首相の名、㉕は現在の人類以前の各段階の化石人類の名で、それぞれそれらのいた時期をも代表させている。

2－4　セットかプロセスかはっきりしない場合でも、「順に」等の順次進行の意味をあらわす語を加えると、プロセスのよみがはっきりする。例えば、次のaは（言語外的な知識がないと）、「～ト」は「世の中を震撼させた大事件」の内訳を任意に列記したセットの「～ト」ともよめる。しかし、bのように、ややこなれないが「順に」を加えるとプロセスの意がはっきりする。

㉖・a　この年は下山事件、三鷹事件、松川事件と、世の中を震撼させた大事件が起こった年である。

㉖・b　この年は下山事件、三鷹事件、松川事件と、世の中を震撼させた大事件が順に起こった年である。

2－5　述部が時間的進展の意をもたぬ状態性の意味の場合、内実列記型のプロセスの「～ト」のよみは生じないのがふつうだが、言語外知識や推論によって順次進行的な意味が読みとれることがある。例えば、①は既に見たように、「～ト」に列記される項目の順序を入れ換えたところで、読みとられる事柄的意味に変わりはなかった。

① 炊事、せんたく、障子張りと、今日は本当に忙しい。

すなわち、セットの「～ト」のよみになる（注7）。しかし、次のような例では、述部が状態性の意味であるにもかかわらず、aの「～ト」をbのように入れ換えると、おかしくなる。

㉗・a　入試、採点、合格発表と、二月から三月にかけては本当に忙しい。

㉗・b？採点、入試、合格発表と、二月から三月にかけては本当に忙しい。

入試の次に採点、そして、合格発表というのがものの順序だと我々は知っており、その知識によってよむから、aの「～ト」に崩せない順序を感じるのである。この種の言語外的知識や推論によって「～ト」にプロセス的な意味が読みとられることもある。ただ、こうした点に関しては、知識・推論の個人差がある（例えば、①の「忙しい」主体が、「炊事」「せんたく」「障子張り」の順でやるのだという知識がよみ手にあれば、①

の「〜ト」はプロセスの「〜ト」とよめるが、そういう知識がなければ、セットの「〜ト」とよんで違和感がない）。従って、このレベルになると解釈もあいまいになりがちである。述部等との相関から構造の問題としておさえきれないのだから、意味－統語論的な記述の埒外なのかもしれないが、プロセスの「〜ト」のよみには、文の構成要素の相関からはおさえきれない言語外の知識や推論の問題が常にからんでくる点、厄介なことがある（注8）。

2－6　今度は、セットの「〜ト」のよみになる場合について考えてみよう。

セットの「〜ト」のよみになってくるのは、まず、先のプロセスの「〜ト」の裏返しで、述語が時間的な進展の意味を示さない状態的な表現で、「〜ト」に時点（段階）の系列を表す語が列記されるのでなく、その状態・状況の内実を構成する項目名が列記される場合である。

㉘　テレビ、ラジオ、講演と、彼は売れに売れている。

㉙　無断欠席、塾でのテスト拒否と、純二（松岡昌宏）の様子が最近おかしい。

（朝日新聞、朝、一九九〇・八・二一）

これらの「〜ト」に列記される項目の順序は入れ換えてもさしつかえなかった（もっとも2－5にふれたように、言語外知識によってプロセス的なよみが生じるなら、順を変えられなくなるが、以下、その問題はいったん措いて述べる）。こうした状況の内実を述べる例では、㉘のように「〜ト」で列記される項目が個物ではなく事柄的な内容のものであることが多い。（㉘の「テレビ」「ラジオ」の場合も、「テレビ出演」「ラジオ出演」という事柄と解せられる）（注9）。

さて、右のような例は、次のような例を介して、もう一つのタイプのセットの「〜ト」の表現に連続している。

㉚　テレビ、ラジオ、講演と、彼はいろんな方面で売れている。

㉛　白人黒人東洋人と、人種の方も揃って、……

（畑正憲「ムツゴロウの世界博物誌　Part1」）

これらの例では、一方ではこの項目列記が㉘㉙の場合と同様、「いろんな方面で売れている」「（人種が）揃っている」状況を具体的に示すものともとれるが、より直接には「テレビ、ラジオ、講演」が「いろいろな方面」の、また、「白人黒人東洋人」が「人種」の、それぞれ内実を示すものともとれる。そうした、複数集合的な意味を帯びた名詞句とはっきり結びついてその内実を列記して提示する用法のセットの「〜ト」の表現の方が、より多く目にするものである（注10）。

㉜　こうしてわたしは、エクセター、ボルトン、リーミングトンと三ヶ所にある訓練所のうち、……

（佐々木たづ「ロバータ　さあ歩きましょう」）

㉝　ある会社の社長、局長、部長、課長、係長、平社員と、いろいろな立場の人たちが……

（畑正憲「ムツゴロウの猫読本」）

㉞ 『古今著聞集』の博奕篇には、遠く天武天皇の時代にまでさかのぼって、主として、囲碁や双六の勝負のさいにおこなわれた朝廷における賭博のはなしが物語られ、賭けものとして、離宮、唐綾、銀の笙、さらにまた、後鳥羽院のいうように、金銭――と、さまざまなもののつかわれてきたことがあきらかにされている。（花田清輝「小説平家」）

㉟ 新聞には、殺人、誘拐、事故と、いやな事件ばかり並んでいる。

㉜㉝㉞のようにモノを表す名詞句の内実としては具体的なモノを示す項目が、また、㉟のように事柄を表す名詞句の内実としては具体的な事柄を示す項目が列記される。

2－7　既に見てきたように、「いろいろ」「さまざま」といった不特定多数の意の修飾語がつくと、セットの「～ト」のよみが明確になる。これは、修飾の場合ばかりでなく、述語となっても同様で、この場合、主語にくる語（句）に示される事物・事柄が多様であるというその内実を列記して示す文となる。

㉜ 客の好みも、和食、洋食、中華料理といろいろだ。

「いろいろ」「さまざま」のような語句は、多様なものを同じレベルで一括りにするニュアンスが強い。従って、先の⑤のようにプロセスの「～ト」とよめる典型的な表現でも、

⑤・a　信号は、青、黄、赤と変わる。

⑤・d　信号は、青、黄、赤といろいろに変わる。

と、dのようにすると、セットの「～ト」とはっきりよめるようになる。ちなみに、次のe・fと、先のb・cを比較してほしい。「いろいろに」を加えると、配列が問題にならなくなってくる。

⑤・e　信号は、赤、青、黄といろいろに変わる。

⑤・f　信号は、黄、青、赤といろいろに変わる。

実際のよみに際しても、読み手が、こうした「いろいろ」「さまざま」などの意味を読み込んでいくと、2－2で見たようなプロセス的によめた表現も、セットのよみで読めてしまうのである。

3－1　以上、プロセスの「～ト」とセットの「～ト」について、少し立ち入って見てみた。このうち、プロセスの「～ト」は、いわば時間軸に沿った物事の進展・変化を、「～ト」に関係項目を列記・配列し、その線条性を利用して写すものである。だが、項目の線条的配列を利用して写されるのは、時間軸上の推移・変化ばかりではない。

㊲ ここから南は、鈴鹿山脈、上野盆地、笠置山地と続く山がちの地形だ。

㊳ 吾妻の連峰は東吾妻、中吾妻、西吾妻、東大巓、中大巓、西大巓、家形、烏帽子人形石、大早稲沢、東鉢とよこにながく、また、いくえにもかさなってひろがり、……

（戸川幸夫「北へ帰る」）

これらは、空間的な地形・山の配置を「～ト」で写したもの

で、やはり、「〜ト」の内部の項目を入れ換えることはできない。項目の配列の線条性を利用して、事物の線条的配置のあり方を示したものである。こうした「〜ト」を線条配置の「〜ト」と呼ぼう。

線条配置の「〜ト」によって事物の空間的配置を示せるのは、その事物が線的にたどれる並びをしているということがわかる場合で、例えば、述語として「続く」「連なる」「並ぶ」などが出ている場合である。そうした述語でなければ、配置の順に列記されていても、配置を示したものということはっきりしてこない。

㊴・a　濃尾平野には、木曽川、長良川、揖斐川と、大きな川が流れている。

これは、「〜ト」の項目の順序をいろいろ入れかえてもかまわないように思える。

㊴・b　濃尾平野には、長良川、揖斐川、木曽川と、大きな川が流れている。

もう一つ、注意すべきは視点の問題である。「並ぶ」のように、事物が非連続的に線条配置されることをいう表現では、平面的に全体を一望できる視点をとりやすいような事物が並ぶなら、むしろ、セットの「〜ト」のようによまれやすい。

㊵・a　テーブルの上には、コップ、灰ざら、茶わんと並んでいる。

これも、「〜ト」の項目の順序をいろいろ入れかえてもかまわないように思える。

㊵・b　テーブルの上には、コップ、茶わん、灰ざらと並んでいる。

平面的に一望する視点のとりにくい遠く広がる地形などの表現として、典型的な線条配置の「〜ト」の表現が出てくるのも、こうしたこととかかわるものであろう。

こうした場合、線条配置の「〜ト」のよみをはっきりさせるには、次のように方向づけの表現を加えることである。

㊴・c　濃尾平野には、東から、木曽川、長良川、揖斐川と、大きな川が流れている。

㊵・c　テーブルの上には、手前から、コップ、灰ざら、茶わんと並んでいる。

なお、次のように、それ自体が系列性をもっている次のような例もある。

㊴・d　濃尾平野には、東、中央、西と、大きな川が流れている。

これは、「大きな川が流れている」という事柄の成立する場所を示すもので、先のプロセスの「〜ト」の時点列記型に対して言えば、線条配置の「〜ト」の位置列記型とでもいえよう。

3−2　我々は、大小・高低・広狭とか、善悪・良否等の比較の結果として、事物の序列を考える。そうした順序が「〜ト」で示されることがある。

㊶　太郎、二郎、三郎と偏差値が低くなる。

㊷ この建物は、一階二階三階と売場面積が狭くなる。

㊸ 三年もの、十年もの、十五年ものと、味がよくなる。

「〜ト」には、比較される事物が列記される（比較される事物の比較される内実が列記される場合は稀である。4－3参照）。列記された項目の順序は、もちろん入れ換えることはできない。その点、プロセスの「〜ト」や線条配置の「〜ト」と同様配列の順序に意味をもたせた表現だが、時間や空間とは本質的に無関係の事物相互の関係の表現である。述部には、「低くなる」など、「形容詞・連用形＋なる」で関係の推移をいう形がくるのが最もふつうである。こうした「〜ト」を、比較序列の「〜ト」と呼ぼう。

3－3　以上、「〜ト」形式の列記表現として、プロセスの「〜ト」と同様、列記項目の配列順に意味をもたせる線条配置の「〜ト」と比較序列の「〜ト」を見た。以下、これらも考慮に入れつつ、プロセスの「〜ト」を中心に、今少し検討してみよう。

4－1　これまで、単純な例をまず考えてきたが、この種の「〜ト」形式の表現は、更に複雑な形をとる。例えば、次のようなプロセスの「〜ト」の例である。

㊹ 谷川前名人は、一回戦で内藤九段、二回戦で桐山九段、準決勝で大山十五世名人と勝って決勝に進出した。

㊺ 収穫高は、一九七〇年は十万トン、一九八〇年は五万トン、一九九〇年は三万トンと減少し続けた。

これらは、「〜ト」に列記されるものが、例えば、試合のラウンドと人、年次と数量、など二項の組み合わせになっている。こうした組み合わせ表現を、これまでの単項列記の表現に対し、二項組み列記と呼ぼう。二項組み列記の表現はいろいろ考えられるが、まず、右のような例に注目したい。この種の例は、よく目にするものだが、時点系列の項目と内容系列の項目が結びついた形になっている。それ故、二項の一方をおとしても、以上に見たような、単項列記のプロセスの「〜ト」の表現として成り立つ。もちろん、その場合、一項をおとした「〜ト」の表現は、もとの二項組み列記の表現と、言っていることは矛盾しないと解せられる。

㊹・a　谷川前名人は、一回戦、二回戦、三回戦と勝って決勝に進出した。

㊹・b　谷川前名人は、内藤九段、桐山九段、大山十五世名人と勝って決勝に進出した。

㊺・a　収穫高は、一九七〇年、一九八〇年、一九九〇年と減少し続けた。

㊺・b　収穫高は、十万トン、五万トン、三万トンと減少し続けた。

こうした二項組みの項目は、いわば事柄の整理枠と実質内容の結びつきと言っていいのではないだろうか。つまり、㊹なら、

（対戦ラウンド）	（対戦相手）
一回戦	内藤九段

二回戦　――　桐山九段
準決勝　――　大山十五世名人

のように、整理項目と実質内容との関係と考えるとよいと思う。

つまり、このような段階段階においてこのような相手に順に勝ってきたのである。それを二項組みで併せて列記しても、また、内容の方を順次列記しても、また、内容より段階・時点の方が問題になるなら、整理の節目である各段階・時点を列記しても、プロセスの「～ト」の表現はできる。ちなみに、aの整理枠を残した表現にした場合、時点系列の表現となったことも、納得がいくだろう。事柄の時間的進展を整理する節目は、各時点・段階なのである。

4－2　二項組み列記の表現は、形としては、他にも考えられる。いくつかあげておくと、次のようなものは、二項であっても、三つのとりあわせ、三つの順次の動きが示されるだけだから、単項列記と本質的に変わらない。

㊻　家庭の必需品といわれるものも、電気釜に洗濯機、テレビに冷蔵庫、ステレオにクーラーと変わってきた。

㊼　七色唐辛子は、緑から赤、赤から紫、紫から茶と変色する。

また、次のように、対象・主体とその動きの方向やふるまい・変化のあり方を示す例はいろいろ考えられるが、これらも、プロセスの読みが出てくるのは、単項列記と同様の条件によるとみられる（注11）。

㊽　彼は、茶わんを左、灰皿を手前、消しゴムを右と動かした。

㊾　渥美からメロン、豊橋からカマボコ、浜松からウナギと荷物が到着した。

㊿　彼は、サザエをつぼ焼き、カツオをタタキ、エビをフライ、タイを生け造りと料理した。

(51)　卓郎が百円、和博が二十円、善行が五円玉と、寄付をした。

こうした例に比べると、時点系列と内実系列の結びつきで、進展する事柄の表現という意が明確になっている㊹㊺のような二項組みの例は注目すべきものといえよう。

4－3　整理枠と実質内容との結びつきという二項組み表現は、線条配置の「～ト」や比較列記の「～ト」についても考えられる。

整理枠となる時点・位置の項目系列と結びつくことで、時間的進展や空間的配置の順が明示されるから、単項ならプロセスや配置のよみがはっきりしないような例でも、プロセスや配置によめる。aとbを比べてほしい。

(52)・a　第一打席は三振、第二打席はキャッチャーフライ、第三打席はサードゴロと、彼は今日はパッとしなかった。

(52)・b　三振、キャッチャーフライ、サードゴロと、彼は今日はパッとしなかった。

㊸・a　濃尾平野には、東に豊橋、中央に名古屋、西に一宮と、大都市が存在する。

㊸・b　濃尾平野には、豊橋、名古屋、一宮と、大都市が存在する。

「パッとしなかった」は、状態性の述語だから、単項ならbのようになり、セットのよみが強くなるところ、㊷も同様である。

今度は、比較列記の「〜ト」についてみてみよう。比較されるもの－その実質という結びつきが、整理枠－実質内容の結びつきといえる。

㊹・a　面積は、一階が二百三十平米、二階が百五平米、三階が五十平米と狭くなっている。

しかし、これについては、整理の枠（比較されるもの）を残して単項列記の表現することは自然でも、実質内容の方だけを残して単項列記にすることは、不自然である。

㊹・b　面積は、一階、二階、三階と狭くなっている。

㊹・c？面積は、二百三十平米、百五平米、五十平米と狭くなっている。

cは、少なくともそれぞれ何の広さかがわからないと、使えない。

㊹・d　妙な建物で、一階から二階・三階と小さくなっている。面積は、二百三十平米、百五平米、五十平米と狭くなっている。

比較に際しては、比較されるものが第一で、比較される実質的な数量は、それに付随するものなのである。

4－4　セットの「〜ト」についても、いろいろな二項組み列記の表現は考えられよう。しかし、「いろいろだ」などの述語と結びつくセットの「〜ト」を考えても、記述できないくらい多種多様のものが出てくることは予想できる。セットの「〜ト」は、任意に構成項を列記したとよまれるものであって、右のような、整理枠－実質内容という結びつきを云々すること自体、あまり興味をひくものではないので、ここでは立ち入らない。

5　ここで、併せて次のようなものもあげておこう。プロセスの「〜ト」は異なるが、やはり事柄の進展過程を写すものである。

㊺　一匹、また一匹と岩の割れ目に姿を消してゆく。
（朝日新聞日曜版「新どうぶつ記」取材班「新どうぶつ記1」）

㊻　わたしはすばやく、また一刷毛、一刷毛と、絵筆を加えた。（H・ジェイムス〔蕗沢忠枝・訳〕「ねじの回転」）

㊼　二度、三度と、ワシはいっぱいに翼をひらき、……
（遠藤公男「帰らぬオオワシ」）

㊽　女子の（引用者注・喫煙者の）増え方が、学年が上がるにつれ、二倍、五倍と急増している点が注目される。
（伊佐山芳郎「嫌煙権を考える」）

㊾　陽子はいいながら、一歩、二歩、三歩と歩く。

（槻野「いまを生きる」）

⑥⓪ 二時間、三時間と闇雲に船を走らせて海にとびこんだ。

（畑正憲「ムツゴロウの大漁旗」）

⑥① 日に二十本、三十本と釣れ、六十本になる日もあった。

（同　右）

これらは、対象や主体、時点といった客体的なものを列記するのではなく、話し手の順次の把握を列記することによって進展過程を示すものといえる。つまり、事柄の進展を、それを見ている（読んでいる）話し手が数えあげ順次カウントする、そのカウントを列記することを通してなぞって示しているのである（注12）。故に、「〜ト」に列記されるのは、数・量・回数の表現である。これを、プロセスカウントの「〜ト」と呼ぼう。

ちなみに、1－3で見た「百円とかからない」もこれに連続するもので、「（十円、二十円と払っていって）百円とはかからない」といった含みでの言い方がもともとで、カウントしていって、そこまでは至らぬその点を示して、それ以下の意を表わしたものであろう。もちろん、列記形式の「〜ト」でないし、ほんのわずかという特有のニュアンスで使われるから、これはこれで一つの独立した形式ではある。

6　以上、この稿では、項目列記の「〜ト」の表現として、

（一）並列的にある事物・状況の構成項を任意にとり上げて写すセットの「〜ト」の他に、列記配列によって事柄の時間的進展を写すプロセスの「〜ト」がある。

（二）項目の線条的配列に意味をもたせて事柄を描く表現として、プロセスの「〜ト」の他に、線条配置の「〜ト」や序列列記の「〜ト」がある。

（三）事柄の進展過程を写すのに客体的な項目を列記するプロセスの「〜ト」の他に、主体的なカウントを列記するプロセスカウントの「〜ト」がある。

といったことを述べ、個々には立ち入って見てみた。なお、考えるべき問題（注13）もあるが、続稿を期すことにする。

（一九九〇・九・二四　稿）

〔注〕

（1）この種の「〜ト」形式の表現と「引用」とのかかわりについて、大まかな素描は、藤田（未刊）に述べた。

（2）この項目の関係づけを助詞等で明示できる場合もあるが、二項目ぐらいについてのことで限られている（それ以上は、列記表現と併用することになる）。

ア・a　信号は、青から黄へと変わる。

ア・b　信号は、青から黄、赤へと変わる。

この種の助詞による過程性の明示は、また、次のような一項目でも行なえるし、その反復表現もある。

イ・a　和博は、北へと歩いていった。

イ・b　和博は、北へ北へと歩いていった。

従って、この種の助詞による過程性の明示の表現は、この

稿で扱うプロセスの「〜ト」とは重なる部分もあるが、別の広がりをもった表現とみられる。この稿では問題にしない。

(3) 次のような一語文的名詞表現が出てくるものは除く。

ウ　それまんじゅう、それおもちゃと、日ごろののぞみをいちどきにみたしてくれるのです。

（壷井栄「私の花物語」）

エ　東京ナンバーの車で、レジャーだ、スポーツだと、きれいな猟犬をつれてくる。（遠藤「帰らぬオオワシ」）

これらは、そうした状況で発せられた（かの如きコトバ）をひくことで、その状況・その雰囲気をリアルに写し出すものであるが、その稿の問題とは異なる。

(4) もっとも、信号の場合は循環的変化だから、aの「〜ト」の配列を変えても結果的にはおかしくないこともある。

(5) 慣用や一般的な序列意識で順序がかえにくい次のような例はここでいうプロセスの「〜ト」等とは別の問題である。

オ　飲む・打つ・買うと三拍子揃った男。

カ　横綱、大関、関脇と人気力士総出場。

(6) 国研（永野）（一九五三）S．109

(7) 話し手の意図の上では、「炊事、せんたく、障子張り」の順でやるつもりなのかもしれないが、この表現から、その意図を一義的に読みとることができない以上、この「〜ト」は、セットの「〜ト」と解さざるを得ない。

(8) 極端な話だが、順に列記されればそんな順序で解すべきものとの読み込みをする傾向が我々にあるといってもよかろう。

(9) ただし、次のような表現も可能であろう。やや飛躍が感じられるが、「〜ト」と述部の関係が推論できるなら、かなり強引な言い方も許容されよう。

キ　野良猫、おんどり、番犬と、小屋の中は大騒ぎだ。

(10) 次の「並ぶ」も配置の意味はなく、並列列記の「〜ト」を導くものだろう。その点、ケの「ある」などと近い。

ク　そんなわけで、小さん師匠門下で、小せん、さん助、つばめと並ぶ柳家姓の真打の中で、ただ一人、立川姓の真打が生まれた。

（立川談志「現代落語論」）

ケ　豊橋、岡崎、一宮とある支店の中で、ここが一番大きい。

(11) ただし、この種の例では、個々の二項の組みが一つの動き・事柄をそれぞれあらわすという具体性が強まるともよめるので、単項列記の場合に比べ、術語の示す事柄の進展を具体的に示すというより、バラバラの並存する事柄を各組みが示すというセットのよみが強くなるかもしれない。

(12) これに関連して考えられるのは、「次々と」という表現で、

コ・a　兎が次々と穴から出てきた。

も、もともとは、

コ・b　兎が「次」「（また）次」と出てきた。

というように話し手が一つ一つ目にして数えあげるような把握の仕方からきているのかもしれない。

(13)「〜トナル」形式の表現は、主語との関係で、プロセスの「〜ト」のようにもセットの「〜ト」のようにもなる。また、一項のみが出てくる次のスのような用法もある。こうした表現についても、いずれ検討を進めていかなければならない。

サ　過去三年の収穫高の推移は、百二十トン、百トン、八十トンとなっている。

シ　多国籍軍のメンバーは、アメリカ、イギリス、フランスとなっている。

ス　代金はすべてで三千三百五十円となる。

〔参考文献〕

国立国語研究所（永野賢）（一九五三）『現代語の助詞・助動詞』秀英出版

藤田保幸（未刊）「『引用』の解体――『引用されたコトバ』の表現と『〜ト』副詞句の表現、その諸相」（『愛知教育大学研究報告』40（人文科学編））

〈付記〉この稿をなすにあたり、田野村忠温・丹羽哲也・服部匡の各氏に有益な御助言をいただいた。また、用例ついては、愛知教育大学学生西村和美の演習発表レジュメによったものがある。あわせて、謝意を表したい。

（ふじた・やすゆき　愛知教育大学助教授）